

**P3-47 解剖献体における子宮頸部-坐骨棘間結合組織の検討**

広島大

平田英司, 藤原久也, 山本弥寿子, 工藤美樹

【目的】子宮頸部の支持組織として子宮頸部-坐骨棘間の結合組織 (Uterospinous connective tissue: USCT) の存在を検索した。また、支持組織としての USCT の意義と分娩歴との関連を検討した。【方法】1. 同意を得た解剖献体 17 体 (56~91 歳, 未産 8 体, 経産 9 体) を使用した。背臥位で坐骨棘まで剖出後に仰臥位で内診し、子宮頸部に対するダグラス窩の位置を (1) 同じ高さ, (2) ダグラス窩が 2 横指未満まで低い, (3) 2 横指以上低い 3 段階に、頸部と坐骨棘の間の厚さを (1) 1 横指未満, (2) 1 から 2 横指未満, (3) 2 横指以上の 3 段階に分類しそれぞれ比較検討した。2. 子宮頸部-坐骨棘間の冠状断準連続切片を作成し HE 染色と Masson-trichrom 染色し USCT を検索した。【成績】1. 未産婦と経産婦で、ダグラス窩の位置は (1) 頸部と同じ 37.5% (3/8), 0% (0/9), (2) 頸部より 2 横指未満低位 25% (2/8), 77.8% (7/9), (3) 2 横指以上低位 37.5% (3/8), 22.2% (2/9), USCT の厚さは (1) 1 横指未満 12.5% (1/8), 44.4% (4/9), (2) 1 以上 2 横指未満 0% (0/8), 33.3% (3/9), (3) 2 横指以上 87.5% (7/8), 22.2% (2/9) で経産婦では頸部に対しダグラス窩が低位になり USCT が薄くなっていた ( $P < 0.05$ )。2. USCT は 52.9% (9/17 例) に認めた。【結論】解剖献体で USCT の存在を確認した。また分娩によるダグラス窩の伸展と USCT の脆弱化が示唆され、骨盤臓器脱の一因と考えられた。

**P3-48 間欠式下肢マッサージの女性の下肢周径・皮膚温・血流への効果の月経周期による差異**

大阪電気通信大医療福祉工学専攻

宮野聡子, 明野 遥, 田口 優, 細野剛良

【目的】下肢浮腫の軽減効果が期待されるため美容目的で間欠式下肢マッサージは広く用いられている。女性では筋ポンプの弱さと性ホルモンレベル変動により下肢の浮腫を起こしやすいが、下肢マッサージの効果の月経周期による差異の検討は少ない。下腿に 18kPa の圧を加える間欠式マッサージ器を使用し、下腿マッサージの身体効果の月経周期による変動を検討した。【方法】問診・視診等により下肢血栓の既往のないことを確認した女子大学生 7 名 [21.6±0.3 歳 (平均±標準偏差, 以下同)] を対象とした。月経周期を確認の後、日中に安静座位の上、間欠式下肢マッサージを 15 分間実施した。間欠式下肢マッサージ前後における下肢径、下肢の皮膚温度、下肢の血流速について検討した。下肢径は大腿・下腿において測定した。サーモグラフィにより下肢皮膚温度を、超音波ドプラ法により膝窩動脈の血流速を測定した。本学生体倫理委員会の承認と書面による同意の上で本研究を実施した。【成績】間欠式下肢マッサージ直後の下腿周囲径・大腿周囲径は、月経周期に関係なくそれぞれ 0.3±0.3 cm, 0.7±0.4cm 減少した。下肢の皮膚温は、月経期、卵胞期において間欠式下肢マッサージ後に温度がそれぞれ 0.3±0.5°C, 1.3±1.0°C 上昇したが、黄体期には 0.5±0.4°C 低下した。膝窩動脈血流速は月経周期によらず間欠式下肢マッサージにより 5.7±1.3 cm/sec, 5.2±1.0cm/sec 増加した。【結論】間欠式下肢マッサージにより、月経周期によらず下肢周径減少と血流増加したが、下肢の皮膚温は月経期・卵胞期で上昇、黄体期では低下した。黄体期には核心温を高く維持するために皮膚からの熱放散抑制のため、皮膚温が低下したと考えられる。

**P3-49 蒸気温熱シートの 1 時間装着による月経痛和痛の効果**

大阪電気通信大医療福祉工学専攻

細野剛良, 田口 優, 宮野聡子, 明野 遥

【目的】月経痛の和痛法として、シート表面で約 40°C の状態を 8 時間維持できる蒸気温熱シート (HSG) の 5 時間以上装着の有用性が報告されている。しかし、その短時間使用の和痛効果は不明である。HSG による下腹部 1 時間加温による月経痛和痛の効果を検討した。【方法】書面による説明と同意を得た 28 名 (平均 21.1 才) を対象とした。被験者に月経 2 日目 (以下 Day 2) と 3 日目 (Day3) に面積 54cm<sup>2</sup> の薬事承認されている HSG を下腹部に装着させた。HSG 装着前、1 時間後、装着 5 時間以上後 (5-8 時間後) の月経痛症状 (下腹部痛, 腰痛, 腰部鈍重感) を 4 段階評価させた (0: 痛みなし, 1: やや痛い, 2: 痛い, 3: とても痛い)。【成績】Day2 には、HSG 装着前では下腹痛のスコア分布は [(スコア 0) 回答者数割合 0.0% (以下同), (1) 19.2 (2) 50.0 (3) 30.8], HSG 装着 1 時間後 [(0) 11.5 (1) 50.0 (2) 30.8 (3) 7.7], 装着 5 時間以上後 [(0) 38.5 (1) 46.2 (2) 15.4 (3) 0.0] であり、HSG 装着前と比較して 1 時間後、5 時間以上後で有意に痛みが軽減した (カイ 2 乗検定)。痛みスコアの平均値は Day1 において、HSG 装着前 2.11±0.70 (平均±標準偏差), 1 時間後 1.37±0.79, 5 時間以上後 0.74±0.71 (以下, 2.11±0.70/1.37±0.79/0.74±0.71 と記す) と改善した (Friedmann 検定)。Day3 下腹痛 2.00±0.67/1.32±0.75/0.53±0.70, 腰痛では、Day2 1.63±0.72/1.38±0.50/1.19±0.66, Day3 1.36±0.81/1.09±0.58/1.00±0.77 と軽快した。腰部鈍重感では、Day 2 1.84±0.76/1.53±0.70/1.32±0.89, Day3 1.73±0.47/1.27±0.79/0.73±0.79 と軽快した。【結論】Day2・Day3 ともに HSG 装着により 1 時間以上使用で月経痛緩和がみられた。HSG 1 時間以上の使用は月経痛和痛に有用である。